

## 【書評】

桑田 学 『経済的思考の展開——世紀転換期の統治と科学をめぐる知の系譜』

以文社、2014年、277+34+7頁

世界は市場の経済活動が障害なく進行してゆけば諸問題を解決するであろう、という想定がある。つまり世界・社会の秩序づけは市場を統治の対象とすることで可能だとして、自由放任ではなく市場秩序の維持にむけた権力的介入を是認するという新自由主義の思想である。しかし、市場は価格を信号とする行為を要請するが、経済を規定する「自然」の要素がみな価格への共約可能性をもつことはない。世界・社会の秩序づけにはこの自然をも含めた統治を考えねばならず、そのためには「自然経済」「自然計算」の考え方が必要だ、という対案も出されていた。本書は前者をハイエクの市場=自生的秩序論、後者をノイラートの「自然経済」論に代表させて、両者の相克を学史上に詳しく論じたものである。

まず二つの引用を、「熱力学第二法則は、外部からのエネルギー供給なしに無限の富を生み出すような、永久運動する機械の不可能性を示す根拠を提出するものにほかならない。そして人間の経済もまたこの法則を免れえない。つまり無限に富を生み出す永久機関ではありえないのである。」、「クラウジウス(1885)は次のように言う、…次世代の課題は、『自然から得られたエネルギー源の消費に関してある種の経済学を導入すること』、そして『特に、古い時代からの遺産として大地にあり何物によっても代替できない諸資源の浪費を防ぐこと』であると。」(24)

前段で言われたことは、皆がおぼろげには分かっている。はずである。そして「エコロジー」研究や環境経済学にそれなりの期待を寄せる向きも多からう。本書はこの漠然とし

た思いについて、それには経済学史上に具体的な議論と論争史があったことを教えてくれる。また、後段は「いま」に直結する。

本書は4章構成で「序」と「結び」が付せられている。以下、豊富な内容を簡単に紹介する(詳しくは、小林純『ドイツ経済思想史論集III』(唯学書房、2015年)第IV章)。

序と第1章「生物経済学の源流」は上記の問題圏を鮮明に描き、ジェヴォンズ『石炭問題』の資源論やラスキンの「富」の考察を承けた諸思想を論じる。ゲデスの説く地域主義は「有機体(人間)と環境(場所)を媒介する機能の役割を果たす労働や産業のあり方、そして生命の多面的な豊饒化を実現しうる最広義の環境的条件を創り出すという、ある種の庭師的な都市計画や統治を志向」(55)していた。核分裂の人工制御に可能性と危険を感じた科学者ソディは、世界大戦の経験から技術利用の社会的制御を重要課題と受けとめて経済学に転身した。彼は、富の生産に用いられた物理的エネルギー単位や人間の生活時間単位など、多様な種類の「富すべてに共通に適用可能な、富を測定する一つの物理的手段を得ることは、困難または不可能である」(69-70)として伝統的経済学を批判し、「実質的な富」と「仮想的な富」の乖離を減少させる貨幣改革を提案した。この問題意識はポランニーに通じ、貨幣論ではゲゼルやケインズの影響もうかがえる。こうした自然科学から社会科学への越境をハイエクは「科学主義」として批判したが、それは、オストヴァルトのエネルギー一元論には妥当しても、ゲデスやソディが問題とした「基本的な生存の場と

しての(経済)の再生産という局面」(76)を削ぎ落とすものだった。

第二章「自然経済の理論—オットー・ノイラートの経済思想」では、その局面を正面から扱ったノイラートの自然経済論が「社会主義経済計算論争の失われた位相」として説明される。「富」の規定にあたり彼は、生活基礎・生活秩序・生活条件・生活の基礎、の四つの位相に分けて考察する。とくに生活条件は「幸福の内的条件」ともされ、ここに衣食住や労働・余暇の時間、教育などと共に罹病率や乳児死亡率、劣悪な労働環境、環境破壊など生活の質を低下させる(ネガ)の要素を含めたのは彼の「経済学批判」である。彼は人を「経済人」ではなく「多様な自然事物とのきわめて複雑な相互関係や絡み合いのなかにある一つの生物種」と捉えた。注目点は、彼の「自然経済」論が、①理論経済学の一類型としての自然経済学対抽象的経済理論(理論・科学的レベル)、②社会的選択の基礎としての自然計算対貨幣計算(意思決定の道具のレベル)、③経済秩序の一形態としての自然経済対自由交換経済・市場経済(実践・歴史的なレベル)、の二つの水準をもつものとして説明されたことである。ミーゼスやハイエクは②と③を区別せずに扱っている。

第三章「経済的統治の論法—エコノミーからカタラクシーへ」では、様々な社会改革プランをめぐる論争という文脈で経済計算論争が再検討される。ここでハイエクがテクノクラートや社会工学を批判する論理、また(エコノミーとカタラクシー)二分法で上記の問題局面削ぎ落としを完遂した過程が説明される。彼は③の水準での市場経済の是認が②の水準の決着だと思った。ノイラートは②で自然経済による(オイコノミア)の統治を構想した(②→③)ので、自然計算や社会的最適の判断に必要な知識の啓蒙と意思決定のあり方を課題として抱えた。いわばハイエクと

は逆向きで経済・科学・統治を問うていた。ハイエク的二項対立の「敵設定」手法が大きな問題を孕むことが行間にも描かれている。

第四章「オイコノミアと自然の理法」は、カップやポランニーの実質経済学の系譜に触れながらノイラートの統一科学運動と自然経済論の関連を示して構想の全体像を描き、寛容(=価格の暴力批判)や多元主義が自由の生産に向かう筋道を描く。その条件は「人間の生存に直結する経済の基礎部分の社会化」。「科学者や専門技術者が果たす役割の制限」。「経済的寛容に基づく異質な生活秩序・経済様態の積極的な共存」と要約された。

本書の功績を①経済学史上にゲデスとソディの系譜を描いたこと、②ノイラート像の書き換え、③ノイラート対ハイエクを「統治」の問題で論じたこと、に見たい。②だけでも本書は衝撃的で世界の高水準の作品だ。③点を内容からみて「オイコノミアの再建」企画という表現でくると、さらなる脈絡と光景が頭に浮かぶ。新自由主義の統治論はフーコーの1979年講義以来多くの議論を呼び、その諸相の批判的検討はいまに続く。そこに刺激的な本書の示唆を重ねた感想を二つ記して評者の責めを塞ぐこととしたい。

第一、環境と共約不可能性を導入することで経済学と公共的意思決定の直結が明示されたいま、カタラクシーにどんな未来があるのか。日本では米麦・原油は市場の需給で価格決定されていない。理論は技術論・処世術の一種として賢い消費者や資産運用者に受容されるが、ハイエク研究者なら均衡価格論など(お笑いの)ネタと受けとめるだろう。合理的選択行為論の拡張/限定となるか。第二、自然(実物)統計の国際的進展と利用可能性について、ノイラートの早すぎた企画も徐々に実現されている。科学技術の進展が自然計算の条件をどう満たしてゆけるだろうか。

(小林 純・立教大学)